

自訟 じしょう (杉浦重剛 すぎうらしげたけ)

登嶽小天下 とねりこくわ
其奈山上山 きなさんじょうさん
仰之一層高 おほひのうへう

岳に がくに 登つて のほ 天下を てんか 小とす しょう

自ら みづか 誇る ほこ 意氣の いき 豪なるを ごう

其それ 山上さんじょうの 山を やま 奈んせん いかんせん

之を これ 仰げば あお 一層いっそう 高し たか

解説 英国留学を終えて帰国したときの作。

語釈 ※嶽=大きな山。※小天下:孟子に「孔子東山に登つて魯を小とし、太山に登つて天下を小とす」とある。高い泰山に登つてみれば、天下さえも小さいと感じた。※自=「みづから」と読んで自分からの意とする。※意氣:意氣込み。※豪=盛んな様子。

※山上山=東山に対する太山の存在のような山。※奈=いかん、どうする。※一層=もう一つの層(建て物の階)の意味である。

通釈 山に登つて下界を眺めると天下も小さなものだと思われ、自ら意氣の豪なることを誇るのである。だが、しかし、いま登りつめた山上にもまた山がある。これはどうしたらよいのであろうか。自分の登つた山はかなり高いと思うのだが、山上の山はさらにいつそう高く聳えている。人間もこれと同じで、自分よりいつそう上の人がいる。決して慢心などすべきでない。